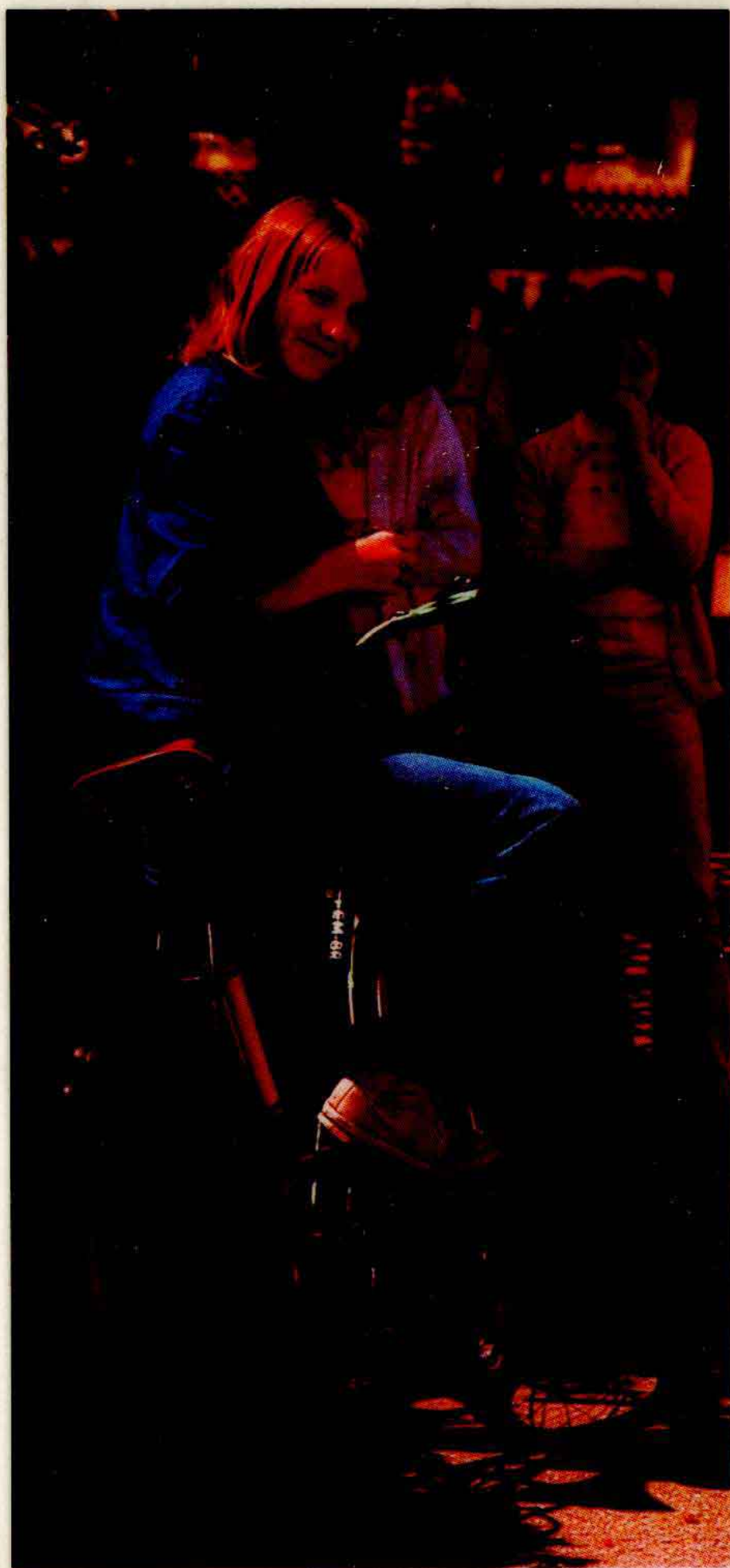


八木孝子

オレゴンの四季



異文化を知る一冊

三修社

オレゴンの四季

昭和六〇年十二月一〇日第一版発行

著 者 八木孝子

発行者 前田完治

発行所 株式会社 三修社

110 東京都台東区下谷一―五―三四
電話 ○二―八四二―七二一
振替 東京九―七二七五八

印刷所
製本所

凸版印刷株式会社

ISBN4-384-07012-8

定価420円

© 1985 Printed in Japan

オレゴンの四季

八木孝子

三 修 社

オレゴンの四季／目次

1 ウイラメット川のほとりで

緑の中のユージン	10
我が家はコッテイジ	13
高い青空、遅い日没	17
リスと遊ぶ	20
失敗だらけの買物	22
初運転	25
カウンティ・フェアで	29
芝刈りは楽し	32
自家中毒とペプシコーラ	34
スーパーの店先で	37
カンダン・エレメンタリー・スクール	41

2 紅葉を踏んで

先生のストライキ	46
小学校の新学期	49
ポットラック・パーティ	52
楽しい英語	53
厳しい予防接種	58
招かれパーティ、招きパーティ	60
ハッピー・ハローウィーン	70
お見舞いの果物籠	75
紅葉の中を	78
チョコレート牛乳は是か非か	81
おはぎをありがとう	82

3 ユージン谷の冬ごもり

学期末個人懇談会	86
みんな仲良し世界の子供	88
素朴なアメリカの味、サタデーマーケット	89
メリー・クリスマス	92
裏のないスカート	103
静かな年の瀬	105
ア・ハッピー・ニュー・イヤー	107
雪の日の休校	109
冬の夕焼け	111
リンの訪問	113
お菓子づくり	116
聖バレンタインデーは春の足音	119
モースさんのこと	120

小学校のガレージセール	122
-------------	-----

4 土の香の春

早春の一日	130
頼れるお姉さん、ダースイ	132
大学の卒業式	137
さようなら、スペシャル・イングリッシュ・クラス	138
縄跳び大会——心臓病の人たちのために	141
イースターの卵	145
ジムおじさんの送別会	146
木の花	148
好みを大切にする教育——ルーズベルト中学校を訪れて	149
模擬結婚式に参列して——サウスユージン高校を訪れて	152
ローリッシュ先生の涙	156
老人会のランチピクニックで	158
小学校のオープン・ハウス	162

一輪の野バラのプレゼント.....	165
オリーブ・プラザのオープン・ハウス.....	167

5 夏の別れ

さようなら、カンダン小学校.....	172
いちご狩り.....	173
かんも積もればテレビとなる.....	176
ポートランドのバラ祭.....	179
さくらんぼの実る頃.....	182
小さな町の文化の香り——アッシュランドのシェイクスピア劇場.....	185
アンティークへの憧れ——オレゴン発祥の町で.....	190
独立記念日と花火.....	192
ティンバー・カーニバル.....	194
さよならパーティ.....	195
ディアボーン先生との別れ.....	197
ムービングセール.....	202

また逢う日まで……………205

さようならユージン、ありがとう友人……………210

1 ウィラメット川のほとりで

緑の中のユージン

一面の広大な平野。澄み渡った青空にまぶしく輝く夏の太陽。頬をなでる快い風。とうとうやってきた。

サンフランシスコから北へ約一時間飛んで、ここは、オレゴン州ユージン市。陽もまだ高い午後六時半、何とも言えぬ心のたかぶりを覚える第一歩であった。

在外研究員としての夫の仕事が決まってから、家族はどうすべきかで、ずいぶん考えた。私自身は、もちろん、いっしょに出かけたい。けれど、小学校三年生の次男はいいとしても、六年生の長男は、中学校にかかるわけだから、帰ってきたら、もといた学校に友もなく、学習の内容はわからないことばかりで、浦島太郎のごとく、うろたえるのではなからうか。それに、喜寿を迎える夫の父は、慣れない外国暮らしに、うまくなじんでくれるだろうか。また、もし、家族五人全員行くことにすると、留守になる家をどうしたらよいだろうか。不安はいろいろあった。けれど、この機会をのがせば、二度とこんなチャンスはない。何事も、その時に最良と思う方法を選んで、先々のことまで考えないというのが、私の今までの生き方だった。今回も、その信念のとおり、何とかなるだろうと、先々のことまであまり心配しないことにして、私も子供たちも父も、夫について行くことに決心した。こうして、家族五人そろってのオレゴンでの一年間の生活が今スタートすると思いは、一種の心ときめきであった。

今着いた客を出迎える人々の中に、笑顔で手を振っている若い夫婦の姿を見つけた。大学のテクニシャンのブランブレイ夫妻だろうと、我々も大きく手を振り返した。前もって家族五人の写真を送ってあったので、彼らには、すぐに我々がわかったらしい。初対面ではこう言おうと、いろいろ考えてきた言葉も、いざとなると、なかなかスムーズに出てこないのをもどかしく思いつつ、差し出された手をしっかり握り返して、初対面の挨拶をかわす。

手荷物を受け取った我々は、夫人のシャロンの運転する赤い車で、空港から、その夜の宿のモートルへ向かう。広い道路の両側にひらけている平野は、はるか彼方まで続いている。何と広々として、のどかな町だろう。空気も澄んでいる。車窓の景色に見とれているうちに、だんだん家並が混んできた。ダウンタウンへ入ってきたらしい。緑の木々が、自然のままの姿で、悠々と枝を伸ばしている。町をつくって並木を植えたのではなく、木立の中に町をつくったというほうがびったりくるような静かで美しい町だ。

モートルでチェック・インした後、ブランブレイ氏の案内で、「ギンザ」という店でいっしょに夕食をとることになった。どんな日本料理が食べられるのかと楽しみにして、我々は彼について行った。そこは、構えこそ割に大きいが、ひなびた感じで、ギンザのイメージとは似ても似つかない。ハワイ系の顔立ちをしたウェイトレスは、かつて日本の子供たちがお祭に着たようなモスの単衣姿で、歩くと裾がはだけて、いかにも、まだその幼さの名残を感じさせる。暗い店の中には、四、五組の先客がいる。一つのテーブルからは、威勢のいい拍子木の音

とジューという肉の焼ける音が、お客さんの拍手と重なって聞こえてきて、賑やかな雰囲気をも少し出している。ショーを交えた鉄板焼らしい。

テーブルについて何を注文しようかとメニューを見ると、鉄板焼のみで、ただ肉の種類がちがうだけなのだ。仕方なくビーフとチキンのをとりまぜて注文する。

店内はそれほど混んでもいないのに、待っても待っても何も運ばれてこない。催促に行くと、しばらくして、ようやくサラダが運ばれてきた。茶碗蒸しの器に盛られた洋風サラダだ。お椀に入ったスープは、味噌汁ともスープともつかぬ妙な味だ。ようやく、我々のテーブルにも、コックさんが材料を持ってやってきた。目の前で鉄板焼が始まった。こしやうをふる手つき、拍子木をたたく手ぶりは鮮やかだ。焼き上がったしいたけやもやしや肉を、一人ずつ小皿にとり分けてくれる。それを、たれにつけて食べるのだ。一時間も待たされた空腹には、鉄板焼はおいしかったが、サラダとスープはどうもいただけない。「ギンザ」などという名で、アメリカ人に、日本のイメージをあんなふうに抱かれると、何かわびしい気がする。そこは、アメリカ人のための店なのであって、我々日本人がわざわざ行くところではなかった。ニューヨークやロサンゼルスやサンフランシスコのような日本人の多く住んでいる町の日本料理店ではないのだ。「ギンザ」という名につられて、期待したほうがまちがっていたようだ。ここはアメリカなのだ、しかと心に言い聞かせた。

時差のために体内時計がまだ昼のせい、床についてもなかなか寝つかれない。朝方近くな

ってようやく寝ついた。

シャロンからの電話のベルの音で、驚いて目が覚めたら、もう十時であった。隣の食堂で簡単な朝食をとる。大人用と子供用の二つのメニューを見せられ、家族全員、子供用のメニューで注文したら、「これでいいのか。」と念を押された。アメリカ人は体格もよく、食欲も旺盛だが、我々日本人は、アメリカの子供用のメニューで十分おなかをふくれるのだ。

食堂は、スモーキングの部屋とノースモーキングの部屋に分かれている。煙草の煙のいやな人は、傍若無人なスモーカーに悩まされる心配がないのだ。子供連れの我々は、ノースモーキングの部屋を選んだ。

ジュースを片手にハンバーガーをほおばりながら、道路を隔てた向かい側の大学構内の緑の芝生に散水しているスプリンクラーを眺めていると、すがすがしいユージンでの初めての朝を迎えた喜びが感じられた。

我が家はコッテイジ

白やクリーム色のペンキを塗った大きな家々を木々の間に見すごしながら、我が家は、青だろうか、黄色だろうかと楽しみにしてたどり着いた家は、何と、ペンキがすっかりはげ落ちて、土色の板肌に見えるみすばらしい小さな家だった。板ぶき屋根には、緑の苔が生え、ガレージの屋根もはがれかけている。

日本出発前に世話になる大学の教授の紹介で、借家として一応予約をとっておいた家だ。これがほんとうに我々の借りる家なのだろうか。これでは、まるでコッテイジではないか。もしかして、ここは納屋で、裏に母屋があるのかもしれない、とは思いつつ、正直いつてすっきり気落ちしてしまった。まあとにかく、見せてだけでももらおうと中に入ると、家の主人は引越し準備の真最中で、とり散らかっていた。

まず、目に入ってきたのは広いリビングルーム。塗りかえたばかりの白壁、白木にワックスで磨きあげた床、中央にはマントルピース、コーナーには観葉植物、外の景色をうつすようにはめ込まれた鏡、さらに、グランドピアノまである。隣は書斎。ちょっと暗いが、部屋の片面は、天井まで届く本棚が組み込まれている。その横がキッチン。ガスレンジ、オーブン、大型冷蔵庫、皿洗い機が備えられている。リビングルームの反対側には、浴槽、洗濯機、乾燥機の備わった洗面所をはさんで、ベッドルームと子供部屋がある。厚手の板に足をつけただけの簡単なベッドだが、一年間の仮住まいには十分だ。家の中には、セントラルヒーティングも備わっている。裏庭の一部にビニールハウスがあり、赤いトマトが実をつけ、緑のセロリが伸びていた。日本の我が家よりずっといい設備だ。

外見より中身が大切だと、外見だけでがっかりした自分を恥じる。夫婦、子供二人、年寄りの五人家族だと、アパートではちょっと狭いようだし、家賃は高いが、無理しても一軒家が必要だ。初めの約束どおり、ここを借りることにした。

家が決まれば次は所帯道具だ。ブランブレイさんは、我々をまず大学へ連れて行った。そこで、ナンシー・平田さんを紹介された。日本語で話せるぞと、台所用品を売っている店はどこにあるかを勇んで彼女にたずねた。ところが、返ってきたのは英語。彼女は、日系二世で、日本語も少しはわかるが、英語を使うほうが自然なのだ。とにかく、店の場所をたずね、その店の会員証を借りて、再びブランブレイさんの車で出かける。

その専門店では、日用品と名のつくあらゆる品物をそろえていた。大工道具一式、台所用品、日用雑貨、フィルム、レコード、額、文房具、おもちゃ、幼児向けの本、画材道具、園芸用品、スポーツ用品、釣り道具など、ところ狭しと並んでいる。ここで片手鍋、テフロン加工の厚手鍋、やかん、それに細々とした日用品をそろえた。

二軒目は、すぐ隣にある食料品のスーパーだ。大きいショッピングカートを押しながら店内を回る。野菜や果物は、パック売りではなく、はかり売りなのでありがたい。けれどポンド単位なので、グラムになおしてみないと、どれくらいか見当がつかないのがちょっと不便だ。肉は、さすがに本場だけあって、大きいかたまりで売っている。うす切り肉などは、並んでいない。東洋食品のコーナーに、お米、しょうゆ、即席ラーメン、とうふなどが並んでいるのは驚きであったが、同時にまた、うれしいことでもあった。大部分の東洋食品は輸入なので高いが、お米は、カリフォルニア産なので、安くてありがたい。日本の半値ぐらいで買えるようだ。夫の父は、「ごはんが食べられないのなら、ついて行かぬぞ。」と言っていたので、おいし